埼玉学園大学・川口短期大学　機関リポジトリ

A Practical Study of Teacher Training for Special Needs Education at a Public Kindergarten（8）：A Function of Communication Notebook in Training Novice and Young Teachers in Special Needs Education

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤枝, 静暁, 森田, 満理子 メールアドレス: 所属:
URL	https://saigaku.repo.nii.ac.jp/records/1296

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.

実践報告

公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録（８）

――特別支援連絡ノートが若手教員の育成に果たす役割――

A Practical Study of Teacher Training for Special Needs Education at a Public Kindergarten（8）

－ A Function of Communication Notebook in Training Novice and Young Teachers in Special Needs Education －

藤枝　静暁・森田満理子

FUJIEDA Shizuaki, MORITA Mariko

1. はじめに

2007 年度に学校教育法に特別支援教育が位置づけられた。この法整備を受けて，東京都北区の公立幼稚園では，2011 年度より特別支援園内研修が実施されている。第一筆者は 2011 年度より，A 幼稚園（以下，A 園）の特別支援園内研修を担当している。年間の実施回数は１学期と２学期に２回ずつ，３学期に１回，計５回である。その内容は①特別支援対象児及び園で保育の難しさを感じている園児の行動観察を行い，アドバイス等をすること，②保護者支援への相談（保護者面談への同席を含む），③未就園児の会参加者（今後の入園予定者）へのアドバイスの３点である。当日のスケジュールや実施内容の詳細は，担当する幼稚園と打ち合わせて決めている。北区の園児募集要項では，特別支援対象児について「わずかな手助け（日常生活上部分的な介助）があれば，集団の中で他の幼児といっしょに生活することができる障害のある幼児を対象として，各クラス２名まで募集しています」と記されている。

特別支援園内研修当日の流れは Table 1 の通りである。子どもの降園後，保育者全員と第一筆者が顔を合わせ，園内討議（コンサルテーション）が行われる。討議では，特別支援対象児への個別保育，特別支援対象児を含む集団保育，保護者の様子などが取り上げられている。この時間を充実させるためには，第一筆者が，保育者と同程度，子どもを理解していることが望ましい。実際には，年間５回ゆえに，実現は難しい。そこで，第一筆者は，当日の多くの時間を子どもの行動観察に当てるとともに，保育者から子どもの気になる様子を聞き取ったり，保護者から家庭での子どもの様子を聞き取るなど，多面的に情報収集し，子ども理解に努めている。

A 園の概要であるが，立地場所は一軒家が立ち並ぶ静かな住宅街にある。公立小学校の敷地内に併設されており，小学校長が園長を兼任している。近所には歴史のある大きな公園があり，子ども達は遊びながら四季の変化を感じることができる。A 園は２年保育であり，４歳児と５歳児の２学年で構成され，両学年共に単学級であり，特別支援対象児が複数名在籍している。2017 年度の教員構成は園長，副園長，担任２名，特別支援対象児補助員２名，未就園児担当教員１名であった。各クラスの保育者の配置は Table 2 の通りであった。小学校長兼園長は 2017 年に交代し，現在２年目である。副園長は 2015 年に着任し，現在４年目である。副園長を中心に日々の保育が行われている。特別支援対象児補助員（以下，補助員）とは，特別支援対象児が在籍するクラスに配属される保育者である。補助員の主たる職務は特別支援対象児への個別対応と保育補助であり，勤務時間は８時 30 分から 14 時 30 分までである。

筆者らは 2011 年以来，毎年テーマを設定し自らの活動内容をふり返り，紀要に報告している。

Table 1　特別支援園内研修当日の流れ

時間	内容
9：10 〜 9：30	副園長との打ち合わせをする
9：30 〜11：30	遊び，製作活動，行事の練習場面などの観察，保育者から幼児の情報を聴き取る
11：30 〜13：00	昼食準備，昼食時の様子を観察する
13：00 〜14：00	保護者からの個別相談に応じる，子どもの読み聞かせ場面や帰り支度の様子を観察する
14：00 〜14：30	降園
14：30 〜16：00	園内討議（コンサルテーション）

Table 2　H29 年度の保育者配置

	担任教員（正規雇用）	支援員（年度毎の雇用）
4 歳児クラス	新卒で初任，女性	他区より異動，13 年目，女性
5 歳児クラス	新卒 5 年目，女性	新卒 2 年目，女性

本稿は第 8 報となる。第 2 筆者は私立幼稚園および国立大学附属幼稚園に勤務した後，現在，大学にて保育者養成に携わっている。本研究を進める上での，第一筆者のアドバイザーでもある。

2. 問題と目的

グローバル化や情報化，少子高齢化など社会状況の変化にともない，教育専門職としての教師にも変革が求められている。文部科学大臣は 2010 年 6 月に「教職大学院や教員免許更新制等は実現しているが，学校現場の諸課題に必ずしも十分に対応できていないとの指摘もあり，教員が教職生活の各段階を通じて高度な専門性と実践的な指導力を身に付けられるようさらなる改革が求められる」とする理由を添えて，中央教育審議会に諮問した。それを受けた中央教育審議会（2012）は「教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）」を提出した。その答申では，教育現場では，団塊世代の教員の退職に伴い，新規採用者が増えている。それに伴い，初任者が実践的指導力やコミュニケーション力，チームで対応する力など教員としての基礎的な力を十分に身に付けていない。また，近年の教員の大量退職，大量採用の影響等により，教員の経験年数の均衡が顕著に崩れ始め，かつてのように先輩教員から若手教員への知識・技能の伝承をうまく図ることのできない状況があり，継続的な研修を充実させていくための環境整備を図るなど，早急な対策が必要であるといった課題が指摘されている。その上で，教員が探究力を持ち，学び続ける存在であることが不可欠であると指摘されている。なお，これは「学び続ける教員像の確立」と呼ばれている。

A 園も例外では無く，ここ数年で職員構成が変わり，中堅やベテランの教員が異動または退職し，初任者と若手教員が増えている。その結果，初任者および若手教員の資質能力の向上や学び続ける姿勢の育成という課題が急速に浮上している。

こうした現状を踏まえて，第一筆者は「学び続ける教員像の確立」の中で示されている方策の中の「継続的な研修の推進」と「初任者研修の改革」に注目し，2016 年度より，特別支援園内研修が果たしている機能を明らかにする研究に取り組んでいる。

2016 年度は，特別支援園内研修の機能を明らかにするために，若手の担任保育者 2 名を対象として，紙面によるインタビュー調査を行った。その結果，Table 3 の内容が明らかになった（藤枝・森田・新井，2017）。

Table 3　特別支援園内研修が果たしている機能

①　継続的な研修の推進
②　初任者の継続的な研修への参加
③　子どもの情報の集約
④　保育・教育技法の獲得
⑤　保護者対応力の向上
⑥　先輩から後輩への知識・技能の伝承
⑦　子ども理解，観察，援助，記録の書き方などの共通理解

Table 4　特別支援連絡ノートが果たしている機能

①　日々の保育をふり返る
②　紙面上でのスーパービジョン
③　情報交換と共通理解の促進
④　チーム力の向上
⑤　保育者が自分の思いを言語化して発信する力の獲得

2017年度は，副園長が，初任者および若手保育者の育成を目的として開発した特別支援連絡ノートに注目した。開発の背景には，若手の担任や補助員は特別支援対象児への援助や手立てを具体化するのが難しいこと，限られた時間の中で，教職員同士の連携を図り共通理解することが難しいこと，A園のチーム力を高めることが課題および目標としてあった。副園長への紙面によるインタビュー調査および直接インタビューを行い，特別支援連絡ノートがTable 4の機能を果たしていることを明らかにした（藤枝・森田，2017）。今後の課題として，初任者および若手保育者自身の視点から，特別支援連絡ノートの機能を解明することがあげられた。

本研究ではこの課題に取り組むのであるが，まず，初任者および若手保育者の視点を定める必要がある。そこで，高平・若月・佐久間・宮崎・工藤（2015）の調査結果を参考とした。高平ら（2015）は，私立幼稚園教諭92名を対象にアンケート調査を行い，新任時に大変だったことを回顧させることによって，新任時の職務上の困難を明らかにした。調査項目は「初任者研修」「子どもとの関係」「保護者との関係」など13項目であり，各項目に対して「全く大変ではなかった」～「とても大変だった」の6件法で回答させた。また，自由記述欄も設定されていた。その結果，13項目の中でも，「保育について」と「学級経営」の2項目が他の項目と比べて，新任時により大変だったと回想したことが明らかになった。自由記述欄への回答内容の分析から，その具体的内容についても明らかにされた。「保育について」の内容は，①保育の準備や教材研究の時間確保の困難，②保育経験の不足のための困難，③子どもの理解不足による困難，④その他の困難の4つに分類された。「学級経営」については，①子どもの理解や関係を築くこと，②経験不足，③幼稚園の指導体制，④特別な支援を必要とする子どもの指導，⑤保護者との関係の5つに分類された。

以上より，本研究の目的は，初任者および若手保育者が大変だったと感じていることに焦点を当て，その大変さを緩和あるいは克服する上で，特別支援連絡ノートが果たしている機能・役割を明らかにすることである。

3. 方　法

(1) 調査対象者

5歳児クラスと4歳児クラスの担任と補助員，計4名を調査対象とした。なお，4歳児クラスの補助員は他の3名と比べると保育経験が長いが，非常勤であることと担任と補助員は協力して日々

の保育に取り組んでいることから調査対象に含めた。

⑵ 調査方法と時期

調査方法は紙面によるインタビュー法を用いた。その理由は，紙面によるインタビュー法は，直接インタビュー法と比べると，調査対象者が都合の良い時間に回答しやすい（藤枝ら，2017；藤枝・森田，2017）からである。

調査時期は2017年の夏休み中であった。その理由は，調査対象者の負担および保育業務への影響が少ない時期だからである。副園長が調査対象者から回答用紙を回収し，第一筆者が受け取った。回答字数は指定せず，担任と補助員どちらに対しても，「負担にならない字数で書いて下さい」と依頼した。

⑶ 調査項目

担任への質問項目は，担任の業務内容や役割，特別支援園内研修という枠組み，高平ら（2015）の結果を総合的に踏まえたうえで，「保育について（特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち）」と「学級経営について（特別支援対象児を含む集団を保育する上での役立ち）」の2つとした。

補助員に対する質問項目は，上記の理由に加えて補助員の職務内容，将来正規職員をめざしている者もいることを踏まえて，5つを用意した。補助員には，その内2つを任意で選択し回答するよう依頼した。項目は「保育について（特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち）」「担任と補助員の連絡，連携における役立ち」「保育内容の明確化における役立ち（自分がすべきこと，できることの明確化）」「副園長から特別支援連絡ノートを通じてアドバイスを受けて，自分の保育で変わったこと」「仕事への動機づけ，意欲の向上」であった。

⑷ 倫理的配慮

第一筆者が副園長および調査対象者に調査協力を依頼し，強制では無く，自由参加であることを伝えた上で，同意を得た。

4. 結　果

クラス毎の結果を述べる。なお，回答の中の「支援児」とは「特別支援対象児」のことであり，「副担任」とは「補助員」，「ノート」とは「特別支援連絡ノート」を指している。

⑴ 5歳児クラス

5歳児クラス担任の回答はTable 5，補助員の回答はTable 6に示した。5歳児クラスの補助員は問1では「保育について（特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち）」，問2では「担任と補助員の連絡，連携における役立ち」を選択した。参考として，5歳児クラスの担任の2つの問いに対する回答文字数は約1000文字であり，補助員のそれも約1000文字であった。

問1：保育について（特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち）の回答

2名の回答には，以下の3つの話題が含まれていた。

① 自分の保育を振り返り，翌日の保育につなげることができた

担任は，日々の保育の中で，ノートを用いることで，支援方法を立ち止まって考えることができる。副担任が記録した支援児の様子をもとに，支援児の育ちや必要な手立てを自分なりに考え，さらに管理職の教師と話し合うことで，支援がより具体的になり，翌日からの保育にすぐに生かすことができている（Table 5，問1の1段落目）と記述していた。また，「ノートに書く」という作業をすることで，頭の中で考えていたこと，感じていたことを意識することができ，自分自身の援助について振り返ることができると感じている（Table 5，問1の2段落目）」と述べていた。

補助員は，特別支援ノートには，その日の活動の中における支援児の言葉や表情や行動，それに対する補助員の援助を書いている。（中略）また，支援児にとって，補助員としての自分が行った言葉掛けや環境の準備などの援助は，どのような効果があったのか，適切だったのかを振り返ることができる。さらに，支援児の姿や補助員の援助を踏まえて，支援児の課題や今後の支援の在り方について明確化し，次の日の保育に繋げている（Table 6，問1の1段落目）と述べていた。また，ノートに書き留めておくことによって，いつでも

Table 5　平成 29 年度 5 歳児クラス担任

問 1　保育について（特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち）

日々の保育の中で，特別支援ノートを用いることで，支援方法を立ち止まって考えることができる。副担任が記録した支援児の様子をもとに，支援児の育ちや必要な手立てを自分なりに考え，さらに管理職の教師と話し合うことで，支援がより具体的になり，翌日からの保育にすぐに生かすことができている。

私は，「ノートに書く」という作業をすることで，頭の中で考えていたこと，感じていたことを意識することができ，自分自身の援助について振り返ることができると感じている。自分で一度考えた支援の手立ても，周囲の教師と話し合っていくうちに，今必要な手立てが他にもあることや，別の視点からの支援方法に気付いたり，担任と副担任の支援の方向性がずれてきていることに気付いたりすることがある。特別支援ノートがあることで，副担任と担任，管理職のそれぞれが考えていることが明らかになり，支援の方向性を共通にすることができ，支援児についての理解が深まっていると感じる。

支援児についての具体的なエピソード記録と，支援の手立てについての記録を，継続して記入していくことで，ノートを振り返った際に，支援児の育ちが明確に分かり，保護者に育ちを伝える際にも役立っている。支援児に対しても，育ちが分かることで，肯定的な言葉掛けが多くなっているように思う。また，支援方法について自分たちが試行錯誤しながら支援をしていきた経過も分かり，自分たちの変容も実感することができると感じている。

問 2　学級経営について（特別支援対象児を含む集団を保育する上での役立ち）

私は，特別支援児を含めた学級経営への難しさを感じている。遊びの中で，個への支援ばかりに目が向いてしまい，学級全体としての動きが滞ってしまうことがある。また，個々の育ちが学級に返っていないと実感することがある。支援ノートに具体的に手立てを書いていくことで，自分の援助の仕方や立ち位置，学級の幼児と支援児にどのように関わり保育を進めていくかをシュミレーションすることができ，学級全体の保育をする上でも役立っている。また，支援ノートを通して，支援児の育ちを教師が実感できることにより，支援児の努力していることや，育ってきていることを学級の話題にあげ，友達からも認められる機会を少しずつ取り入れられるようになってきた。

Table 6　H29 年度５歳児クラス補助員

問 1　特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち

特別支援ノートには，その日の活動の中における支援児の言葉や表情や行動，それに対する支援員の援助を書いている。例えば，「A 児の『怖い』という言葉は，何か不安を感じているのではないか，または，分からないことや困ったことがあるのではないか」というように，それらを書くことによって，支援児の姿の背景にある思いや感情を読み解くことができる。また，支援児にとって，支援員としての自分が行った言葉掛けや環境の準備などの援助は，どのような効果があったのか，適切だったのかを振り返ることができる。さらに，支援児の姿や支援員の援助を踏まえて，支援児の課題や今後の支援の在り方について明確化し，次の日の保育に繋げている。

また，ノートに書き留めておくことによって，いつでも支援児の姿やこれまでの援助を振り返ることができるので，支援児の興味・関心や人間関係の変化に気付いたり，過去に行った援助を参考にしたりしながら毎日の援助を考えることに役立っている。

さらに，ノートを書いていく中で，「A 児と R 児が繋がっている」「R 児は製作に興味をもっている」という事実のみではなく，「A 児と R 児は何がきっかけで繋がったのだろう ?」「R 児はどうして製作に興味をもったのだろう ?」などと，私自身が支援児に対して「知りたい」という思いが強くなり，より支援児を理解しようとするようになった。

問 2　担任と副担任の連絡，連携における役立ち

特別支援連絡ノートは，支援員，担任，副園長先生で回覧している。回覧することによって，支援児の姿や支援員の援助，支援児の課題や今後の援助を共有し，共に支援児について考えることができる。さらに，ノートを回覧するのみではなく，毎日の朝会の中で支援児について周知しておきたいこと，その日の活動の中でどのような援助を行うかを話すことで，担任と支援員の間のみではなく，職員全員で情報を共有し，全員の視点から支援児の援助を考え，行うことができる。

このように，ノートを回覧したり，朝会で話したりすることで，「私 1 人ではなく，職員みんなで支援児を見ている」という安心感から，いつでも気軽に支援児について話すことができるようになった。しかし，ノートに書き，朝会で話すにあたって，相手に分かりやすく簡潔に伝えなければならないので，文章を短くまとめることに難しさを感じている

支援児の姿やこれまでの援助を振り返ることができるので，支援児の興味・関心や人間関係の変化に気付いたり，過去に行った援助を参考にしたりしながら毎日の援助を考えることに役立っている（Table 6，問1の2段落目）と述べていた。

② 特別支援対象児の理解や支援の方向性を共有することができた

担任は，特別支援ノートがあることで，副担任と担任，管理職のそれぞれが考えていることが明らかになり，支援の方向性を共通にすることができ，支援児についての理解が深まっていると感じる（Table 5，問1の2段落目）と述べていた。

補助員の問1の回答でも，ノートに書き留めておくことによって，いつでも支援児の姿やこれまでの援助を振り返ることができるので，支援児の興味・関心や人間関係の変化に気付いたり，（以下，省略）（Table 6，問1の2段落目）と述べていた。その具体例として，ノートを書いていく中で，「A児とR児が繋がっている」「R児は製作に興味をもっている」という事実のみではなく，「A児とR児は何がきっかけで繋がったのだろう？」「R児はどうして製作に興味をもったのだろう？」などと，私自身が支援児に対して「知りたい」という思いが強くなり，より支援児を理解しようとするようになった。（Table 6，問1の3段落目）と述べていた。

補助員は問2「担任と副担任の連絡，連携における役立ち」の回答のなかでも，ノートは，補助員，担任，副園長先生で回覧している。回覧することによって，支援児の姿や補助員の援助，支援児の課題や今後の援助を共有し，共に支援児について考えることができる（Table 6，問2の回答）と述べていた。

③ 保育者が自身の変容に気づくことができた

担任は，支援児についての具体的なエピソード記録と，支援の手立てについての記録を，継続して記入していくことで，ノートを振り返った際に，支援児の育ちが明確に分かり，保護者に育ちを伝える際にも役立っている。支援児に対しても，育ちが分かることで，肯定的な言葉掛けが多くなっているように思う。また，支援方法について自分たちが試行錯誤しながら支援をしてきた経過も分かり，自分たちの変容も実感することができると感じている（Table 5，問1の3段落目）と，述べていた。

補助員も，ノートを回覧したり，朝会で話したりすることで，「私1人ではなく，職員みんなで支援児を見ている」という安心感から，いつでも気軽に支援児について話すことができるようになった（Table 6，問2の2段落目）と述べていた。

問2：学級経営についての回答

担任の回答（Table 5の問2）には学級経営に関して2つの難しさが挙げられていた。

1つ目は，特別支援児を含めた学級経営への難しさであった。その中身は，遊びの中で，個への支援ばかりに目が向いてしまい，学級全体としての動きが滞ってしまう，ことであった。こうした難しさを感じながらも，ノートに具体的な手立てを書き込んでいくことによって，自分の援助の仕方や立ち位置，学級の幼児と支援児にどのように関わり保育を進めていくかをシュミレーションすることができ，学級全体の保育をする上でも役立っている，と述べていた。

2つ目は，担任は個々の育ちが学級に返っていないと実感していることである。この課題に対して，担任は，ノートを通して，支援児の育ちを教師が実感できることにより，支援児の努力していることや，育ってきていることを学級の話題にあげることによって，友達からも認められる機会を少しずつ取り入れられるようになってきた，と述べていた。

⑵ 4歳児クラス

4歳児クラス担任の回答はTable 7，補助員の回答はTable 8に示した。4歳児クラスの補助員は問1として「担任と補助員の連絡，連携における役立ち」，問2として「副園長から特別支援連絡ノートを通じてアドバイスを受けて，自分の保育で変わったこと」を選択していた。参考として，4歳児クラスの担任の回答文字数は約600文字であった。補助員のそれは約700文字であった。

問1：保育について（特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち）の回答

担任の回答には，主として，2つの話題が含まれていた。

Table 7　平成 29 年度 4 歳児クラス担任

問 1　保育について（特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち） 支援児との関わりをノートに書き留めることで，いつでもその場面を振り返ることができ，「次はこうしてみよう。」と支援児の姿を予測しながら，意図をもって援助ができるようになってきた。例えば，支援児が初めての活動に参加する際は，安心して取り組めるよう，必ず前もって知らせることを副担任と共有している。しかし，援助が毎回うまくいくとは限らない。そんな時，「自分の言葉掛けは適切であったか」や「視覚教材は十分に用意されていたか」など，様々な視点から振り返りをし，ノートにまとめることで，次に活かすことができる。また，難しいと感じた関わりを，自分だけでなく副担任と共に考えていく姿勢をもつことで，よりよい援助の方向性を見付けることができると考えている。
問 2　学級経営について（特別支援対象児を含む集団を保育する上での役立ち） 支援児の好きなことやお気に入りの場所などをノートにまとめていき，それらを少しずつ学級に伝えていくことで，周りの幼児たちは支援児に親しみをもちながら関わる姿が見られてきた。支援児のことを，「困った子」「○○できない子」というマイナスなイメージではなく，「面白いことを思い付く子」などとプラスなイメージで捉えていくことで，学級全体が温かい雰囲気になれば良いと感じている。副担任と共に，集団の中でこそ経験できることを考えながら，支援児にとっても周りの幼児にとっても豊かな育ちにつながっていくよう，保育を展開していきたい。

Table 8　平成 29 年度 4 歳児クラス補助員

問 1　担任と副担任の連絡，連携における役立ち 特別支援連絡ノートを書くようになってから，支援児と関わっていく中で，「～した方がいいかな？」「～だったらこうしよう」など自分なりに感じたことや考えたことを担任に自分から伝えることが増えた。また，「今，○○ちゃんが～したら楽しそうな笑顔になったよ」とか，「○○くんが～したら面白い感じになったよ！」など担任と支援児の実態を共有できるようになったと感じる。 今までも，担任と声をかけあっているつもりだったが，保育中は互いに子どもたちと関わっているため声をかけるタイミングを伺い，「今は無理か？」「あとで話そう。」と思っては話せずに終わってしまったり，共有する時間も取れずにいたりした。この連絡ノートは，担任と支援児の実態を話したりする上でとても役に立っている。
問 2　ノートを通じて管理職からのアドバイスを受けて，自分の保育で変わったこと 特別支援連絡ノートを通じて，自分が感じたこと，支援してどうだったかに対して副園長からのアドバイスを受けられた。その際，「○○のことに対してあなたはどうしたらよかった？」と聞かれることで私自身の考えも直接伝えるきっかけにもなった。また，保育している中で副園長先生に「今，○○ちゃんが～してくれて，他の子と繋がりました！」と少しずつではあるが気軽に話せるようになった。連絡ノートは交換日記のような役割も果たしていて，保育後にその日の支援児の様子や，私が掛けた言葉かけ・動きに対してすぐに答えをもらえることで，失敗を怖がることがなくなり，アドバイスを元に自分から実践することが増えて保育の幅が広がった気がする。

① 保育を振り返り，次に生かすことができた

担任は，支援児との関わりをノートに書き留めることで，いつでもその場面を振り返ることができ，「次はこうしてみよう。」と支援児の姿を予測しながら，意図をもって援助ができるようになってきた。（中略）援助が毎回うまくいくとは限らない。そんな時，「自分の言葉掛けは適切であったか」や「視覚教材は十分に用意されていたか」など，様々な視点から振り返りをし，ノートにまとめることで，次に活かすことができる（Table 7，問 1）と述べていた。

② 担任と補助員，管理職が情報を共有し，より良い援助ができるようになった

担任は，支援児が初めての活動に参加する際は，安心して取り組めるよう，必ず前もって知らせることを副担任と共有している。（中略）難しいと感じた関わりを，自分だけでなく副担任と共に考えていく姿勢をもつことで，よりよい援助の方向性を見付けることができると考えている（Table 7 の問 1）と述べていた。

補助員は，問1への回答において，今，○○ちゃんが～したら楽しそうな笑顔になったよとか，

「○○くんが～したら面白い感じになったよ！」など担任と支援児の実態を共有できるようになったと感じる。今までも，担任と声をかけあっているつもりだったが，保育中は互いに子どもたちと関わっているため声をかけるタイミングを伺い，「今は無理か？」「あとで話そう。」と思っては話せずに終わってしまったり，共有する時間も取れずにいたりした。このノートは，担任と支援児の実態を話したりする上でとても役に立っている（Table 8の問1）と述べていた。

補助員は問2の回答において，自分と管理職の連携に言及している。特別支援連絡ノートを通じて，自分が感じたこと，支援してどうだったかに対して副園長からのアドバイスを受けられた。（中略）連絡ノートは交換日記のような役割も果たしていて，保育後にその日の支援児の様子や，私が掛けた言葉かけ・動きに対してすぐに答えをもらえることで，失敗を怖がることがなくなり，アドバイスを元に自分から実践することが増えて保育の幅が広がった気がする（Table 8の問2）と述べていた。

問2：学級経営についての回答

担任は，支援児の好きなことやお気に入りの場所などをノートにまとめていき，それらを少しずつ学級に伝えていくことで，周りの幼児たちは支援児に親しみをもちながら関わる姿が見られてきた。支援児のことを，「困った子」「○○できない子」というマイナスなイメージではなく，「面白いことを思い付く子」などとプラスなイメージで捉えていくことで，学級全体が温かい雰囲気になれば良いと感じている（Table 7の問2）と述べていた。

5. 考　察

本研究の目的は，特別支援連絡ノートが初任者および若手保育者の職務上の困難や難しさを克服する上で果たしている機能について，保育者自身の視点から明らかにすることであった。そのために，学級担任および補助員を対象として，紙面によるインタビューを行った。インタビューの項目に沿って考察する。

(1) 保育について（特別支援対象児を理解する，保育する上での役立ち）

回答結果から，特別支援連絡ノートが以下の4つの機能・効果をもたらしたことが明らかになった。

第1に，特別支援連絡ノートに書くことによって，保育者が自分の保育を振り返り，次の保育に生かせるようになったことがあげられる。

5歳児クラス担任は，Table 5の問1の回答の中で，日々の保育の中で，ノートを用いることで，支援方法を立ち止まって考えることができる。私は，「ノートに書く」という作業をすることで，頭の中で考えていたこと，感じていたことを意識することができ，自分自身の援助について振り返ることができると感じている。（中略）その結果，今必要な手立てが他にもあることや，別の視点からの支援方法に気付いたり，（以下，省略）と述べていた。

4歳児クラス担任は，支援児との関わりをノートに書き留めることで，いつでもその場面を振り返ることができ，「次はこうしてみよう。」と支援児の姿を予測しながら，意図をもって援助ができるようになってきた。（中略）援助がうまくいかなかった時には，自分の言葉掛けは適切であったか，視覚教材は十分に用意されていたか（Table 7の問1の回答）と具体的な振り返りを行っていた。

そもそも，記録を書くことは幼稚園教育の質を支える重要な行為である（長谷部・加藤・坂東，2014）。なぜならば，記録を書くことは自分の考えに向き合うことであり（半田，2018），文章にすることで，自らの保育を振り返ることができ，曖昧だった自分のねらいがはっきりしてくる（横井，2018）からである。2名の回答は，こうした指摘の意味を実践を通して裏付るものであった。

また，2人の回答から，保育者が，特別支援連絡ノートに記述する→具体的に思い浮かべながら振り返る→新たな気づきを得る→次に生かせるという内的作業を行っていることが分かる。特に，初任や若手の保育者の場合，「うまくいかなかった」または「うまくいった」という結果に一喜一憂して完結してしまうことがあるだけに，成長していくためには，内的作業が重要と言える。

第2に，保育者同士が気になったことについて

話し合ったり，共有することができるようになったことである。その結果，子どもの理解が深まったり，保育の方向性を共通理解したり，新たな支援方法を得ることにつながっていた。

5歳児クラス担任は，担任と副担任の支援の方向性がずれてきていることに気付いたりすることがある。副担任と担任，管理職のそれぞれが考えていることが明らかになり，支援の方向性を共通にすることができ，支援児についての理解が深まっていると感じる（共にTable 5の問1の2段落目）と述べていた。4歳児クラス担任は，難しいと感じた関わりを，自分だけでなく副担任と共に考えていく姿勢をもつことで，よりよい援助の方向性を見付けることができると考えている（Table 7の問1の回答）と述べている。

半田（2018）は，実践記録は書いて終わりでなく，それをもとに話しあうことに大きな意義があると述べている。意義の中身として，自分の考えに向き合うこと，子どもへの見方が広がり，自分にはない保育の視点に気づくことを挙げている。2名の回答はこの主張を支持するものであった。

また，各クラス補助員の回答から，保育者同士が話し合うことや共有することが保育者の感情に良い影響を与え，働きやすさにつながっていることが明らかになった。5歳児クラス補助員は，ノートは，支援員，担任，副園長先生で回覧している。回覧することによって，支援児の姿や支援員の援助，支援児の課題や今後の援助を共有し，共に支援児について考えることができる。（中略）ノートを回覧したり，朝会で話したりすることで，「私1人ではなく，職員みんなで支援児を見ている」という安心感から，いつでも気軽に支援児について話すことができるようになった（Table 6の問2の回答）と，述べていた。4歳児クラス補助員もまた，連絡ノートは交換日記のような役割も果たしていて，（省略）失敗を怖がることがなくなり，アドバイスを元に自分から実践することが増えて保育の幅が広がった気がする（Table 8の問2の回答）と述べていた。こうした回答は，保育者が互いに子どもの様子を語り合えることの意義は，園全体で取り組む姿勢ができるという点にあるとう滝口（2008）の指摘を支持するものであり，だからこそ，安心して保育に臨めるようになったのであろう。

昨今，多くの保育者が以前よりも保育が大変だ，困難になったと感じている（第二次村山科研子育て支援に関する共同研究プロジェクト，2009），現場の保育者たちは希望を持って実践し続けることができなくなってきており，不安を訴えたり，体調を崩したりする者も増えている（中村，2007）と保育職の大変さが指摘されている。文部科学省（2015）の調査においても，小・中・高等学校と比べて，保育者の離職率の高いことが示されており，その原因として保育者のストレスやバーンアウト現象などが指摘されている（赤田，2010；加藤・安藤，2015など）。

このような厳しい状況を踏まえると，特別支援連絡ノートの利用が初任者および若手保育者に同僚や先輩に気軽に話せるようになった，失敗を怖がることがなくなったという変容をもたらしたことは，注目すべき成果と言える。

ところで，回答した保育者4名全員が子ども理解，今後の支援の方向性などについての「共有できるようになった」ことに言及していた。この結果から，特別支援連絡ノートの導入前は，保育者同士が同じ職場にいながらも，連絡・連携し共有することは簡単ではなかったことが推測される。実際，4歳児クラスの補助員は，保育中は互いに子どもたちと関わっているため声をかけるタイミングを伺い，「今は無理か？」「あとで話そう。」と思っては話せずに終わってしまったり，共有する時間も取れずにいたりした（Table 8の問1の回答）と述べている。

その一因として，両者の雇用形態の違いから生じる勤務時間の違いがあり，連絡・連携するための時間を確保しづらかったと考えられる。別の要因として，クラス担任は集団保育と学級経営，補助員は特別支援対象児の個別支援というそれぞれの役割に基づいて，それぞれが子どもの対応をしているという違いがある。実際に，第一筆者が保育観察をしている間も，担任と補助員が同じ子どもや場面に関わっていることは少なく，それぞれが別々の場面や子どもの対応をしていることが多い。こうした状況だからこそ，特別支援連絡ノートが大きな役割を果たしたと言える。

第3に，保育者が自分自身の肯定的な変容に気づくようになったことがある。たとえば，5歳児クラス担任は，支援児に対しても，育ちが分かる

ことで，肯定的な言葉掛けが多くなっているように思う。また，支援方法について自分たちが試行錯誤しながら支援をしていきた経過も分かり，自分たちの変容も実感することができると感じている（Table 5 の問 1 の回答の 3 段落目）と述べていた。5 歳児クラス補助員は，ノートを書いていく中で，「A 児と R 児が繋がっている」「R 児は製作に興味をもっている」という事実のみではなく，（中略），私自身が支援児に対して「知りたい」という思いが強くなり，より支援児を理解しようとするようになった。（Table 6 の問 1 の回答）と述べていた。4 歳児クラス補助員もまた，ノートは交換日記のような役割も果たしていて，保育後にその日の支援児の様子や，私が掛けた言葉かけ・動きに対してすぐに答えをもらえることで，失敗を怖がることがなくなり，アドバイスを元に自分から実践することが増えて保育の幅が広がった気がする（Table 8 の問 2 の回答）と述べていた。

このように，自分自身の保育者としての成長に気がつくことができれば，保育者としての効力感の獲得につながる。すなわち，保育者が主体的に仕事を継続していくことにつながると考えられる。

第 4 の機能として，保護者との関係づくりにおいても役立っていることがあげられる。5 歳児クラス担任は，支援児についての具体的なエピソード記録と，支援の手立てについての記録を，継続して記入していくことで，ノートを振り返った際に，支援児の育ちが明確に分かり，保護者に育ちを伝える際にも役立っている（Table 5 の問 1 の回答の 3 段落目）と述べている。先出の高平ら（2015）の調査においても，新任保育者の大変なことの一つに「保護者との関係」があげられているだけに，そこで「役立った」という実感は大変重要な意味を持つと言える。保護者にとっても，担任だけでなく他の教師からも我が子の成長を教えてもらえれば，複数の保育者が子どもを見てくれている，理解してくれているという気持ちになり，A 園全体への信頼感や安心感が増すであろう。

⑵　学級経営について（特別支援対象児を含む集団を保育する上での役立ち）

両クラスに共通していたことは，特別支援連絡ノートを介して得たことや気づきを，学級経営に役立てていることであった。

5 歳児クラスの担任の記述から，遊びの中で，個への支援ばかりに目が向いてしまい，学級全体としての動きが滞ってしまうことがある。また，個々の育ちが学級に返っていないと，学級経営の難しさと自己の課題が明らかになった。この課題に対して，自分の援助の仕方や立ち位置，学級の幼児と支援児にどのように関わり保育を進めていくかをシュミレーションする，という解決方法を見いだしていた。また，特別支援連絡ノートを活用することが，学級全体の保育をする上で役立っている様子が分かった。特別支援対象児が育ち，努力していることを学級の話題にあげ，友達から認められる機会を少しずつ取り入れられるようになってきている（Table 5 の問 2 の回答）のである。

4 歳児クラス担任もまた，特別支援対象児の好きなこと，場所，面白いことを思いつくことを少しずつクラスに伝え，温かい雰囲気の学級づくりを行っている（Table 7 の問 2 の回答）。

上記より，担任 2 名は，日ごろから，特別支援対象児と健常児との人間関係づくりを意識した学級経営を心がけている様子が分かる。第一筆者は保育観察を通じて，健常児が特別支援対象児に声をかけたり，遊びに誘ったり，運動会といった行事では，出番や立ち位置などを教えてあげる姿を見てきた。また，年度当初と比べると，時間が経つにつれ，特別支援対象児がクラスで安心した表情で過ごす時間が増えたと感じている。健常児にとっても，特別支援対象児との関わりや交流が，相手の個性や特徴などを理解することにつながっていると感じている。こうした時間を掛けての子ども達の変容は，担任保育者の学級経営によるものと考えられる。子ども同士の人間関係が豊かになることは，保育者に気持ちや時間のゆとりをもたらし，結果として，保育の充実につながっていると感じている。

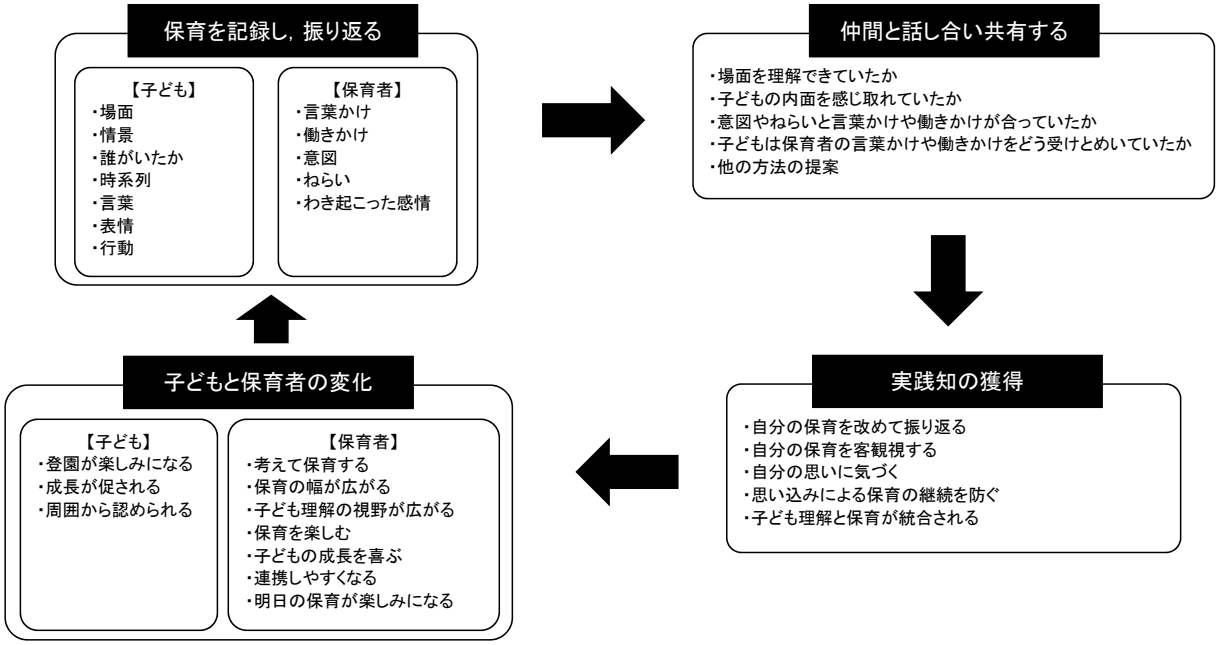


Fig. 1　記録による保育者の成長プロセス

6. おわりに

現場の保育者からは，実践記録が大切なことはわかっていても，いざ書こうとするとなかなか筆が進まないことも多い（全国保育問題研究協議会編集委員会，2018）と言われている。自分の保育といえども，それを記録として文字に起こすことは簡単では無いのである。その要因として以下の2つが考えられる。

1つは，保育職の多忙さである。保育者の労働環境の調査に関わり，保育者の一日を調査を行った横井（2007）によると，仕事中は休憩を取る時間がないか少ない，子どもの保育以外の業務がかなりある。先出の高平ら（2015）の調査においても，子どもが降園した後の時間にも，翌日の保育の準備や教材研究などやるべき仕事は多いという声があがっている。

もう1つは，記録することへの慣れの問題である。横井（2018）が，自分自身が保育者になった最初の頃を振り返り，「何をどう書いていいのか悩んでいた。（中略）日々の記録も悪筆で読みづらく，なによりも「何を記録すべきか」はっきりしていない記録だった」と述べている。平松（2018）は，園長の立場から，「新人は何をどう書けばいいのかわからない」「ただでさえ多忙な保育現場にあって，実践はおろか記録だって書くことが阻まれる現実がある」と記録することの難しさを指摘している。

それにもかかわらず，A園では新任および若手保育者一人ひとりが特別支援連絡ノートに自分が気になったことを記録し，お互いに読み合い，翌日の保育に役立てることができていた。その要因について考察する必要がある。平松（2018）は，自分の働きかけが良かったのか，その答えは一朝一夕には見えてこない。ただ何となく子どもといるのではない，「発達の専門職」として，ふりかえり，積み重ね，失敗し合いながら真理を追究していく作業は，一人ではできないと述べている。経験が少ない初任者や若手保育者はなおさら，一人で考えていても限界があるだろう。だからこそ，特別支援連絡ノートを介して，担任，補助員，管理職が共に話し合いながら，次の有効な援助の方向性を見つけられたことが収穫であったのだろう。つまり，「記述する」という行動に対して，「翌日の保育に生かすことができる収穫がある」という結果が随伴しており，それがあるからこそ，次にまた記述するという行動が生起するのである。これが，新任および若手保育者が実力をつけていくプロセスではないだろうか。このプロセスを視覚化したのがFig. 1である。

別の要因として，特別支援連絡ノートを一人一冊ではなく，保育者全員で一冊を共有する，と位

置づけたことが功を奏したと考えられる。もし仮に，特別支援連絡ノートが一人一冊用意されており，各自が書いて読むだけのものであったならば，平松（2018）が指摘しているように，限界がすぐに来たかもしれない。特別支援連絡ノートが次の保育に役立つのみならず，保育者全員の連帯感を生みだし，「皆で保育をしている」と言う安心感を生み出したのではないだろうか。

今後の課題であるが，藤枝・森田（2017）では，副園長の視点から特別支援連絡ノートの効果を検証し，本研究では保育者の視点から検証した。したがって，それぞれの視点から得た結果をすりあわせ，総合的に考察することが次の課題となる。

引用文献

赤田太郎 2010　保育士ストレス評定尺度の作成と信頼性・妥当性の検討　心理学研究，81，158-166.

中央教育審議会　2012　教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）.

第二次村山科研子育て支援に関する共同研究プロジェクト　2009　保育・子育てに関する第二次全国調査報告書　平成20年度科学研究費補助事業基盤研究（B）　課題番号　19330179.

藤枝静暁・森田満理子　2017　公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録（7）── 初任者および若手教員の養成を目的とした特別支援連絡ノートの開発とその効果 ──　埼玉学園大学紀要人間学部編第17号，101-112.

藤枝静暁・森田満理子・新井邦二郎　2017　公立幼稚園における特別支援園内研修の実践記録（6）── 学び続ける教員像の確立を目指した基礎研究 ──　埼玉学園大学心理臨床研究　第3号，1-9.

半田智美　2018　実践記録　書くことのむずかしさとそれを通した学びの深まり　保育問題研究　No. 291　特集　新たな自分に出会う実践記録　新読書社　55-62.

長谷部朱音・加藤直樹・坂東宏和　2014　幼稚園における保育記録活用を支援するシステムの開発　研究報告コンピュータと教育（CE），124（3），1-8.

平松知子　2018　共に悩める実践のススメ　保育問題研究　No. 291　特集　新たな自分に出会う実践記録　新読書社　34-39.

加藤由美・安藤美華代　2015　保育者のメンタルヘルスに関する国内外の研究の動向と展望 ── 学校教員を対象とした研究を参考に ──　岡山大学大学院教育学研究科研究集録，159，1-10.

文部科学省　2015　平成25年度学校教員統計調査.

中村美奈子　2007　はじめに　恒内国光・東社協保育士会編著　保育者の現在　専門性と労働環境　i-ii.　ミネルヴァ書房.

高平小百合・若月芳浩・佐久間裕之・宮﨑豊・工藤亘　2015　玉川大学教育学部紀要，97-113.

滝口俊子　2008　第13章　保育臨床フィールドワーク　滝口俊子・山口義枝（編）　保育カウンセリング　財団法人　放送大学教育振興会　149-158.

横井美保子　2007　第1章　保育者の労働環境と専門性の現実　恒内国光・東社協保育士会編著　保育者の現在　専門性と労働環境　ミネルヴァ書房　25-58.

横井喜彦　2018　保育者が記録を大切にして実践記録を書く意味とは　保育問題研究　No. 291　特集　新たな自分に出会う実践記録　新読書社　21-33.

全国保育問題研究協議会編集委員会　2018　保育問題研究　No. 291　新たな自分に出会う実践記録　新読書社　6-7.